

回約 日本家政学会37回大会と 関東支部大会に於いて「北方少数民族ウイリタの文様と刺繍について」と題して研究発表を行なった。

ウイリタ民族は非常に少数であり戦後サハリンから北海道に移住したという経緯から日常生活の中で着用された民族衣装の残存資料は少ない。そしてサハリンでの生活を知るウイリタ族も少なくなってきた。この厂更的状况を踏まえ彼等の持つ優れた民族の伝承文化としての刺繍と色彩の美しさに深く興味をもったのである。

今回はウイリタの刺繍が衣生活の中でどのように扱われていたのか衣服形態とあわせて調査し報告する。

方法 サハリンのオタスで採集された残存資料とサハリンでの生活経験をもつウイリタ婦人が製作した衣服を調査し実物製作を試み被服構成の面から検討を行なった。

結果 ウイリタ民族は物質文化の面ではサハリンに於て近隣民族であったギリヤークや樺太アイヌに似ているが衣服形態は樺太アイヌのアハルシヤイキイとは異なりむしろ大陸を居住の場とするツングース系府嶺民族でありトナカイ飼育を生業とするオロクヨン族の衣服により共通点が見られる。かつては大陸も生活の場としていたウイリタ民族であるから共通点があっても不思議ではない。

オロクヨン族の衣服との違いはウイリタの衣服には美しい刺繍がほどこされたものが多いたることである。